

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-09

高齢者コミュニティの素描：サン・ディエゴのランチョ・バーナードを中心として

KOBAYASHI, Kenichi / 小林, 謙一

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

53

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

109

(終了ページ / End Page)

136

(発行年 / Year)

1985-07-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008450>

【調査報告】

高齢者コミュニティの素描

——サン・ディエゴのランチョ・バーナード
を中心として——

小林 謙 一

1. 有料高齢者ホームの増大

狭い救貧から広い福祉へ

当面、日本の高齢者は60歳代前半層を中心として増加しているが、やがて増加の中心は60歳代後半以上に高齢化していくことになる。そうになると職業からの本格的な引退者が急増すると同時に、高齢者の病人や寝たきりや一人暮らしなどが何倍にも増加するだろう。それに対し公共施設・サービスの格段の充実が要請されるのはいうまでもないが、それと同時に旧来の救貧とか収容とかという思想から脱却して、高齢者自身の選択に対応できるようなシステムそのものの転換も必要になっている。そのばあい、そうした選択の対象として、高齢者などの私的負担にもとづく私的施設・サービスも充実し、高齢者福祉全体の公私システム化が志向されなければならないだろう。

とくに老人ホームについては、各種の公的施設の考え方に一貫性がないだけでなく、“生活の場”としての問題点も多数残されており、単に量的に増設されるだけでは済まない状況にある¹⁾。そのために経済的負担力を増しつつある高齢者のなかには、私的な「有料老人ホーム」へのニーズが拡大しつつある。現行では単に届出制に止まっている「有料老人ホーム」に対する保護や規制なども今後は問題となり、全体としての体系づけも問

われることになるだろう。こういう問題を検討していく素材として、いろいろな理由で公的老人ホームなどが少なく、私的な老人ホームやコミュニティの発達しているアメリカや在宅福祉のためのホームヘルパーの確保難から私的な老人ホームなどがふえつつあるヨーロッパなどの事例も参照すべきだろう。

- 1) 例えば片岡直「老人福祉法」、荒木誠之編『新版社会保障法』、1983年などをみよ。

高齢者コミュニティへの視点

とくにアメリカでは、民間の有料老人ホームが何10万もあるといわれ、さらに引退生活者などのコミュニティが何千もあるといわれている。こうした有料老人ホームのなかには、始めは元気な高齢者ばかりだったのが、より高齢化するにつれて相当の介護が必要になったり、そのためにそうした介護を必要とする高齢者のナーシング・ホームが併設されたりしているケースが多い。そのために費用がかさみ、さらにインフレのために入居時の納入金を実質的に減少した結果、経営難に陥り、なかには倒産するようなケースも発生してきている。そして、それに備えるために行政的な規制も施行されてきているのである。

なかでもわれわれの注目を惹くのは、大規模な引退生活者などのコミュニティの開発である。とくにアリゾナ州フェニックス市のサン・シティはある不動産会社が1960年ごろから開発し、現在5万人近くの高齢者などが居住している大きなコミュニティであるが、さらにサン・シティの西部が開発されつつあり、近い将来に7万人ほどの人口を持つ、れっきとした都市に成長しつつある。そこには劇場やスポーツ・センターなどのほか、病院やナーシング・ホームなど、考えられるさまざまな施設が備えられており、立派な高齢者都市を形成しているようである。

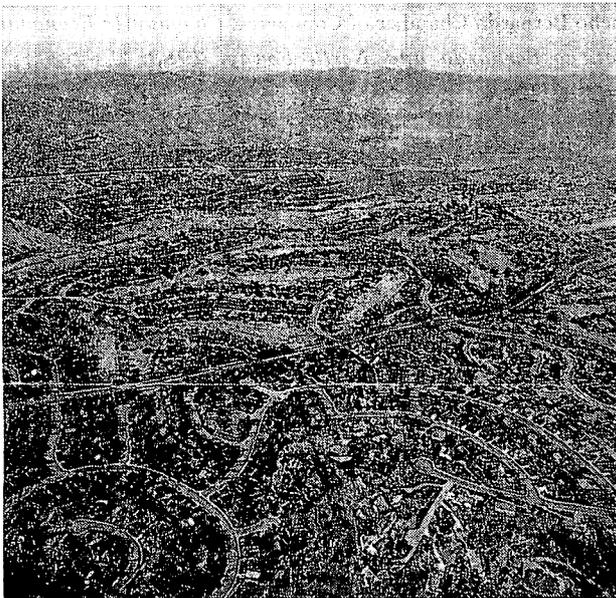
それにくらべれば、昨年私が訪問し、高齢者に若干のインタビューを試みたサン・ディエゴ市郊外のランチョ・バーナード地域は、そのなかにある二つの高齢者コミュニティに5千人ほどの高齢者が住んでいるに過ぎ

ないが、高齢者だけでなく、他地区のコミュニティには若い一般市民も住んでいる、いわば混住型のサン・シティといってよい。そこで、本稿ではそうしたコミュニティとしてのランチョ・バーナードのプロファイルを素描すると同時に、そこの高齢者生活のいくつかのケースを解明し、最後に最近 100 ケ所ほどにふえつつある日本の有料老人ホームとの比較も若干試みておこう。それによって、老人ホームの今後のあり方を考える、若干の素材がえられるだろう。

2. ランチョ・バーナードのプロファイル

代表的コミュニティ

ランチョ・バーナードのコミュニティは、サン・ディエゴ市のダウン・タウンから北方に 40 km ほど離れた丘陵の上に横たわっている。その地名のとおりベルナルド氏の農園か牧場だったのだろう。事実、1960年代の初めまでは牛の放牧場だったのが、62年から民間デベロッパーの開発が始



まり、計画的にコミュニティとして建設され、いまでは2.2万人の人口を擁する大きな地域になっている。

ランチョ・バーナードの商業会議所がサン・ディエゴの政府系機関に委託して作った報告書²⁾によれば、何年かまえランチョ・バーナードは、世界のコミュニティを比較研究していた米ソ合同委員会によって調査されたようである。そしてその調査では、大規模に開発されたコミュニティとして世界でももっともよく出来ている実例の一つとして紹介されたようである。その際とくに「白い石目塗りのしっくいの家屋、赤いタイルの屋根と緑の庭を持った建物、地下のユーティリティ、中央に走るオリーブの林、そして家々のいかにも誇らしげな外観が一緒になって並はずれて魅力的なコミュニティを形作っている。6つの地区にはそれぞれコミュニティ・センターがあり、そこには水泳プール、あわ風呂、サウナ、体操室、集会所およびクラフト・ルームが完備されている」ことなどが記されていたようである。

2) Rancho Bernardo Chamber of Commerce, *Community Economic Profile for Rancho Bernardo and North Poway, 1983*. 以下の統計表はこの報告書から引用した。

ここで間接的にしか紹介できないのは、米ソ合同委員会の調査報告書を探し出すことができなかったからである。政府系機関のどこかに保存されているはずだが、ランチョ・バーナードの商業会議所とサン・ディエゴの市役所にはなかった。大変奇異に思われるのは、米ソが世界のコミュニティを研究する合同委員会を持っていたこともその一つだが、地区のコミュニティ・センターのオフィスや商業会議所やサン・ディエゴ市役所などでも、こうした米ソ合同委員会の共同調査についてこちらから切り出すまで、全然話題にも上らなかったことである。ソヴィエトとの合同だから無視されたのかも知れないが、おそらくそれ以上に世界的視角からの調査などということ自体に対する関係者のアメリカ的無関心のせいだろう。

それはともかくとして、その美観といい、その設備といい、確かに特筆

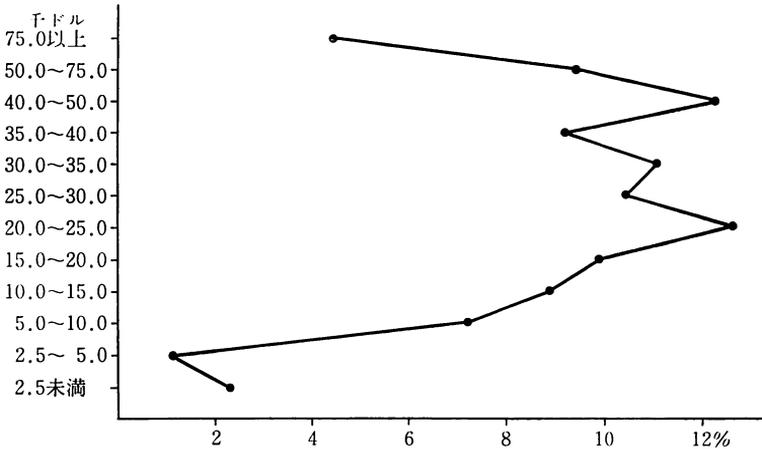
すべきアメリカのこの種のコミュニティを代表している。そこで、もう少し立ち入ってランチョ・バーナードのプロファイルを素描しておこう。ただし、ランチョ・バーナードだけのデータはえられない。だが、1980年センサスは、ランチョ・バーナードのほぼ中央で交わるランチョ・バーナード・センター・ドライブとランチョ・バーナード・ロードの南北・東西に走る二つの基幹道路の交点を中心にした半径3マイル圏の人口、世帯、職業、所得などを調査している。そのデータによるとつぎのようなイメージがえられる。

人口、年齢・学歴構成と職業

まず居住者の人口は3万人に達し、ランチョ・バーナードの住人を8千人ほどに上回るが、3万人の年齢構成はつぎのとおりである。20歳以下の青少年は30%に達するのに対し、21～44歳の青壮年は30%を下回り、ややくびれているが、45歳以上の中高年は40%近く、とくに65歳以上は19%に達している。というのは、6地区中2地区が中高年を中心とした居住区になっているので、中高齢者が肥大化したつぼ型の年齢構成になっているわけである。したがって平均年齢も37歳に達しており、周辺地域に比べてもかなり中高齢化している。

これらの人口のうち、すでに2万人以上は学校教育を終了しているが、その学歴は周辺地域にくらべて比較的高い。4年制の大学以上の卒業者が33%にも達しているからである。さらにそのうち1万人ほどが職業についているが、全人口に対する就業率は36%に止まっている。前述のような高齢者には引退者が多いからである。就業者に立ち入ってみると、経営者・専門職38%、技術者・セールスマン・公務員34%であり、両者で70%以上を占めており、サービス従事者、熟練工、生産労働者などはそれぞれ10%以下に過ぎず、社会階層として中間層以上の職業が主流を占めている。このなかには、ランチョ・バーナードのショッピング・センターなどに勤めている就業者も多少はいるが、大部分は車で30～40分ほどかけてサン・ディエゴ市などに通勤している。

図 1 世帯所得（年）階層別世帯分布

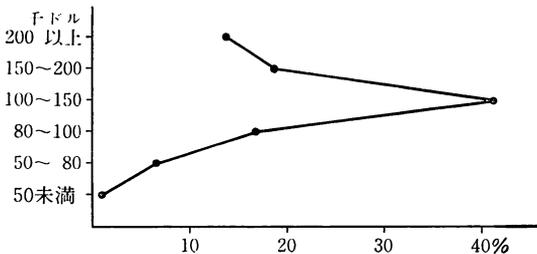


所得と資産

つぎに世帯数に目を転じると、全体で約 1.2 万世帯を数えている。したがって一世帯あたりの人口は 2.6 人に止まっており、2～3 人世帯が主流を占めていることが想像される。このように小人数の世帯が多いことを基準として考えれば、図 1 に示した世帯所得はさすがに比較的高い、とみてよいだろう。平均水準は年間 3 万ドル、1 ドル 250 円とすると 750 万円程度であるが、分布は二つの山を持っており、とくに 4 万ドル以上、1 千万円以上の高所得世帯も多く、全体の 26% にも達している。

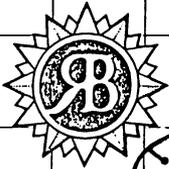
さらに、これらの世帯の 80% 近くは持家であり、その家屋評価は図 2 の

図 2 家屋評価階層別世帯分布



Rancho Bernardo

(City of San Diego)



WESTWOOD
COMMUNITY
PARK

WESTWOOD
FAMILY AREA

INDUSTRIAL PARK

HIGH COUNTRY WEST

BERNARDO
TRAILS

Poway
(North Section)

LOMAS
VERDES

OLD COACH
ESTATES

GREENS

CHAPPALA
AREA

STONERIDGE

OAKS NORTH
Adult Community
45 Yrs. & Older

VINELAND
HILLS

GATEWOOD
HILLS

CARRIAGE
ESTATES

GREEN
VALLEY

SUMMERFIELD

VALLE VERDE

BERNARDO
HILLS

DEL NORTE

BERNARDO
HEIGHTS

SEVEN
OAKS
Adult Community
55 Yrs. & Older

GREEN
VALLEY
HIGHLANDS

○ RANCHO BERNARDO HILLARY:
OFFICIAL AREA INFORMATION AND
HOME SALES CENTER OFFICE.
PROPERTY MANAGEMENT.
Rentals - Furnished & Unfurnished

- RB FIRE STATION
- SWIM & TENNIS CLUB
- SEVEN OAKS COMMUNITY CENTER
- SHOPPING CENTERS
- RB INN - HOTEL, RESTAURANTS.
- CHURCHES, TEMPLES, SYNAGOGUES
- PRIVATE GOLF CLUB
- WESTWOOD CLUB
- INDUSTRIAL PARK AREA
- OAKS NORTH COMMUNITY CENTER
- THE MERCADO
- WESTWOOD SCHOOL - ELEMENTARY
- U.S. POST OFFICE
- SCRIPPS CLINIC
- RB INN - WEST COURSE PRO SHOP - PUBLIC COURSE
- EXECUTIVE COURSE PRO SHOP - PUBLIC COURSE
- LIBRARY
- BERNARDO HEIGHTS COUNTRY CLUB - PRIVATE COURSE
- STONERIDGE COUNTRY CLUB - CLUBHOUSE, RESTAURANT, GOLF COURSE
- TRAILS SALES OFFICE - CUSTOM HOMES & LOTS
- RANCHO BERNARDO REALTY OFFICES

Map courtesy of
Rancho Bernardo Realty, Inc.
Copyright RB Realty 1975
Rev. Feb. 1984



ように10～15万ドル、2,500～3,750万円ほどがもっとも多い。さらに20万ドル以上、5,000万円以上も14%にも達しているから、日本とは異なり地価抜きであることを考慮すると、相当高額である、とみてよい。なお、これらの家屋の70%は detached 式の戸建てであることも指摘しておかねばならぬ。そのほか、センサスでは、これらの世帯が所有する乗用車についても調査しているが、それによると2台所有の世帯が40%近くも占めているうえに3台以上が20%近くにも達している。このように年間所得こそ大した水準でないとしても、相当高額な家屋などの資産を持った世帯が多い、とみてよい。

産業パークなどの施設

1万戸にも達するコミュニティなのだが、不思議なことにサン・ディエゴ市役所の支所も出張所も、さらに警察署の出先もない。警察の方は、近くのエスコンディオ市やポウエイ市から出張してくるようである。地図にも示されているように、消防署と大きな診療所はあるが、入院施設のある病院もまたエスコンディオ市(300ベッド)、ポウエイ市(150ベッド)まで行かなければならない。だが、6つのショッピング・センターがあるほか、小高い丘の上にホテルもある。学校施設はまだ小学校しかないが、それは近年若い世帯が移住してきているからである。そのほか、もともと実業家を中心として組織された奉仕団体やさまざまな市民クラブが100以上もあることにも注目しておく必要があるだろう。さらに、比較的大きな中央図書館があるほか、大小さまざまな教会が20以上もある。また、多数のテニス、水泳、乗馬などの施設もあり、18ホールのゴルフ・コースが2,9ホールが3あることも、居住者の自慢になっている。そのうえ、北部のホジェス湖を含む公園のほか、つぎのような産業パークもある。

それは東南部の小高い丘陵に展開しているが、表1のような企業が進出してきている。この地域は700エーカー近くもあり、ランチョ・パーナード全体の10数分の1ほどを占めているが、近年の設備投資停滞のせいで、まだ4分の1ほどしか利用されておらず、整地されただけの遊休地が広々

表 1 産業パークに進出してきている企業のプロフィール

企 業 名	従業員数	製 品
Sony Corporation	1,800人	TV Set の組立
Hewlett-Packard	1,500	Graphic Computer
NCR Corporation	1,450	NCR Computer
Burroughs Corporation	900	VLSI 半導体
Gremlin-Sega	450	Video Game 製造機
Allstate Insurance Company	400	保険の地域支店
Oak Industries	250	通 信
Northern Telecom	150	半導体の注文生産

と残されている。これまで進出してきている工場などはいずれも排気などによる公害を発生させない工場に限定されており、とくにハイテクノロジー関連の産業が多い。ここだけでなく、投資環境の順位が急激に低下しつつあるカルフォルニアでも、サン・ディエゴを含む南部にはシリコン・ヴァレーから溢れたようなエレクトロニクス工場の進出が目立ってきている。というのは、高級品は望めないにしても低級部品なら南部のメキシコで、きわめて安く加工して持ってくるができるからである。

これらの工場のうち、ヒューレット・パッカードの工場には訪問し、内部を見学し若干のヒヤリングを行ってきたが、その従業員はその大部分がランチョ・バーナードには住んでおらず、近くの都市などから通勤してきている。ヒューレットもパッカードも実は人名なのだが、両氏ともスタンフォード大学の出身者であり、協力してエレクトロニクスの企業を創立し、いまでは例の Fortune 誌の巨大企業に名を連ねる多国籍企業に成長しており、アメリカだけでも5万人以上の従業員を雇用している。ランチョ・バーナードの工場はロス・アンジェルスから工場ごと移転してきたのだが、基幹従業員の大部分もまた移住してきたようである。一応65歳が定年で、大部分の定年到達者はそれで引退するが、本人が希望し企業側が認めれば、さらに雇用延長されるシステムになっており、受付などの間接補助部門では相当の高齢者もフルタイムで働いていた。そのほか、金属やプラスチック

クの部品加工と回路の組立や検査などの直接工程には中高年女性のフルタイムも多かったが、彼女らのなかにはランチョ・バーナードの居住者がほとんどいなかったようである。

3. オークス・ノースのコミュニティ

高齢者コミュニティ

以上、素描したようなランチョ・バーナードの2つの地区、オークス・ノースとセブン・オークスに中高齢者を中心とした小コミュニティがある。オークス・ノースの方は45歳以上の中高齢者を中心としているのに対し、セブン・オークスの方は50歳以上の高齢者を中心としている。いずれも Adult Community と称されているが、60歳以上でみて5,000人を優に上回るとみられる高齢者の大部分が両地区に集中している、とみてよい。両地区を比較すると、セブン・オークスの方がより大きく、それだけに立派なコミュニティ・センターがあったが、オークス・ノースのセンターにも、オフィスを始め、講堂兼体育館、水泳プール、図書室、カードルームなどの小部屋、テニスコート、芝生ボウルの施設のほか、すぐ隣りにゴルフ・コースも設けられていた。

これらの高齢者の80%ほどは本格的に職業から引退した人々であり、近年10年間ほどのあいだに東部や北部を含む全米から移住してきている。人種的にもスパニッシュやデイユイーッシュなど、多様だ、ということだが、有色のマイノリティはきわめて少ないようだった。というのは、移住の条件にこの種の差別はないのだが、すでに触れたような高額の家屋を購入するためには、経済的に、したがってまた職業階層からみても中流以上の階層しか移住してくることができないからである。事実、オークス・ノース・コミュニティ・センターの管理者などからの聞き取りでは、大企業などの経営者を前職とする人々が多いようである。その点はまた、のちに個々のケースで触れることにしよう。こうした高齢者たちは、すでに子供たちが独立してしまったあとの大きな家屋を持ってあまし、高い税金を負担して

いるよりはそれを処分して、気候も温暖で、さまざまな施設が整理され、治安もよいこのコミュニティに移住してきているのである。

高齢者のパーソナリティ

これらの高齢者について特筆すべきことは、いずれもかなり健康な人々だ、ということである。その点ものちに個々に確かめるが、入居条件として日常生活が自分でできることが前提となっているからである。これも管理者などからの聞き取りによると、看護婦などの介護を必要とする高齢者も多少でてきているようだが、そういうケースはとくにオックス・ノースでは少なく、むしろセブン・オックスの方で多くなっているようである。もし自分で身の回りのことができなくなったり入院加療が必要になったりしたばあいは、ナーシング・ホームや病院に移住することとなるわけである。

要するに、これらの高齢者は、多少介護を必要とするとか、通院して治療に当る程度の健康な人々であり、さまざまなクラブに所属しながら、スポーツや教養・娯楽などを楽しみながら、きわめて活動的に引退生活を送っているのである。また逆にいえば、スポーツによって例えば弱りかけていた心臓や筋力を強化しつつ健康を維持しているのである。彼らの活動はそういうことだけでなく、なかにはマネービルに熱心な高齢者も多い。退職年金や貯蓄を消費するだけでなく、むしろそれを積極的に運用して、大型のショッピングをしたり海外旅行にでかけたりしているのである。事実、のちにもみるように証券投資などが盛んだし、また中国などへの大型旅行も多い。

もちろん、このような比較的恵まれた生活条件のなかで、“自分の人生はなんだったのか”とか、“なんのために長生きしているのか”などと、東洋人好みの自省が、これらの高齢者の頭をかすめていくこともあるようだ。例えば、すでに触れたフェニックス市のサン・シティ調査などでも指摘されているところである。だが、そういう自省などより、賑やかに華やかに余暇をエンジョイしようと振る舞うエピキュリアンの方がはるかに多

いように思われる。そのことはつぎのような読書傾向にもあらわれている。

ランチョ・バーナード全体を対象とする中央図書館のほかに、地区ごとにも小さな図書室がある。例えばオークス・ノースにも大きな落ち着いた閲覧室があり、壁に沿って備えられた書架には1万冊あまりの書物などが陳列されてある。年間1ビル支払えば利用できるわけだが、貸出しや返却の管理や読書相談などは40人ほどのヴォランティアの図書委員によって担当されている。その委員からの聞き取りでは、オークス・ノースの居住者の20~30%は常時利用しているようである。チェック・リストをみると、クリスマス休暇のように貸出しのとくに多い期間は別として、1日平均10~20冊の本の貸出しがある。それを分類してみると、スパイ小説がずば抜けて多く、つづいてラヴ・ストーリー、科学書、歴史・伝記、旅行記——とくに中国——、それらについて医学書、趣味物——とくにゴルフ、サイクリング、魚釣り——であり、芸術書とか宗教書とかはきわめて少ないようである。図書委員はベストセラーズやニュー・ヨーク・タイムズなどの書評を参照して月平均7、8冊づつ購入しているが、人生論とか家族問題などの書物はほとんど購入されていないようだった。

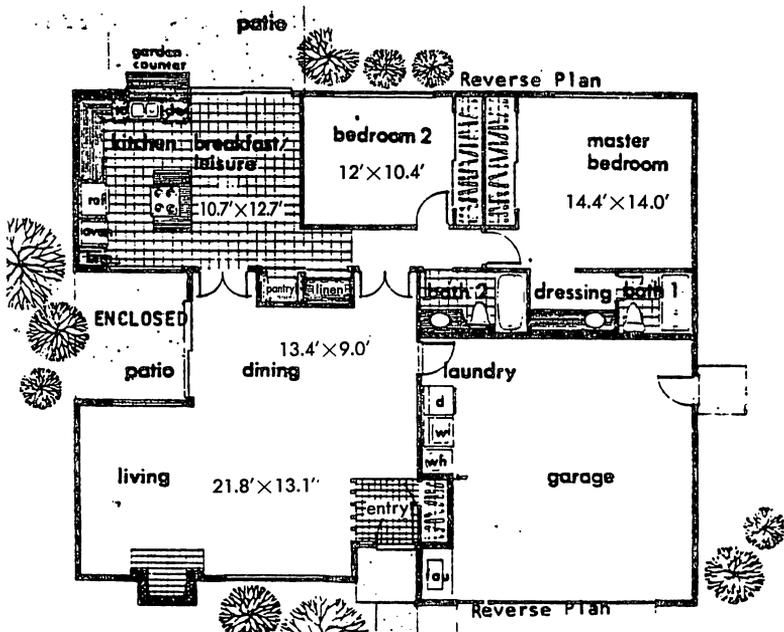
高齢者住宅とその価格

さらに、個々の高齢者生活に立ち入るにさきだって住宅の広さや価格についても一瞥しておこう。いずれもランチョ・バーナードの不動産屋で売り出されている、ごく普通のタイプとみてよいが、図3のモデルAは2車用ガレージつきの2LDKである。Master Bedroomが日本風にいえば12畳ほどあり、浴室が2つ、衣裳室もあり、壁には木製パネルの装飾を施し、セラミックのタイルなどが敷かれ、エアコンづきのゆったりとした小住宅である。建坪はガレージを含め40坪近くで、16.5万ドル（250円換算で4,125万円）の売り値がつけられている。図4のモデルBはガレージなしの3LDKであるが、建坪は同じ40坪近くで12.45万ドル（3,113万円）で販売されている。いずれも一戸建であり、賃貸借のアパートはほとんど

ないが、2～3戸で一棟になっている Condominium も多少建てられている。図5のモデルCはそれである。ガレージなしの2LDKであるが、一階建であり、Patio からゴルフ・コースに行けることがセールス・ポイントになっている。建坪33坪ほどで13.75万ドル(3,438万円)で販売されている。

このように、比較的小住宅ではあるが、設備もよく、構造的にもしっかりしているので、販売価格も3,000～4,000万円で比較的高くなっている。さきの図2では80年センサスの結果をみたが、それによれば10～15万ドルがモードであった。その後のインフレによる価格上昇を考えれば、いずれもごく標準的な販売価格の住宅である、とみてよい。いずれにせよ、のち

図3 モデルA (2LDK, ガレージつき)



広さは平方フィートで示されている。

図 4 モデル B (3LDK)

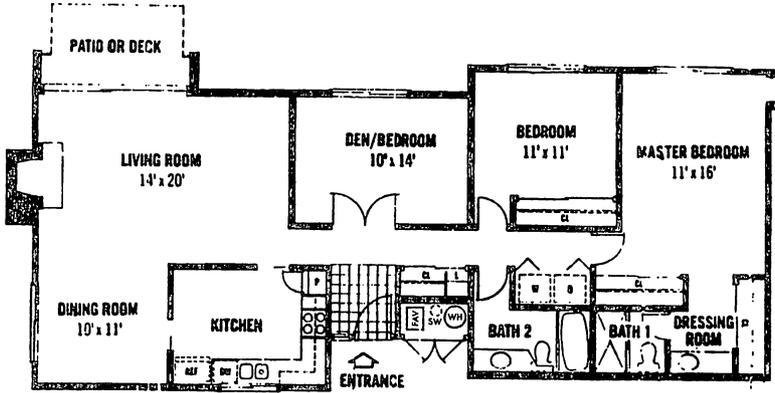
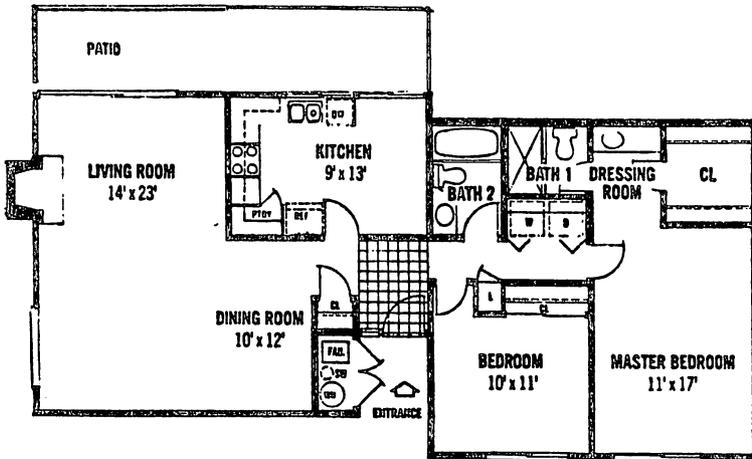


図 5 モデル C (2LDK)



にみる Condominium 式の日本の小さな有料老人ホーム 2,000~3,000 万円の水準を大きく上回っているのである。

4. 高齢者生活の個別ケース

これまで高齢者コミュニティの特徴を素描したが、つづいてこのコミュ

124 高齢者コミュニティの素描

コミュニティにおける高齢者生活の個々のケースについて立ち入ってみておこう。あらかじめ用意した簡単なアンケート調査票に回答してもらい、その内容のコメントとして若干のヒヤリングに応じてもらおうと思ったが、オークス・ノースのコミュニティ・センターの管理者に紹介してもらったにもかかわらず、10人を多少上回る高齢者にしか応じてもらえなかった。しかもデータとして使えるケースは、男7人、女3人、計10ケースしかなかった。アンケートとヒヤリングの結果は、表2、3にそのポイントを記したとおりである。平日の昼下り、コミュニティ・センターのオフィスに待ち構えていて面接したので、それに応じてくれた高齢者のすべてが引退者であり、その大部分がセンターのプールで水泳するためなどにきた人々だった。

男性のばあい

表2 男性高齢者の

氏名	年齢	前住地	現住地の居住期間	世帯人数	ベトナム人	前職	前職の所得(年)
W. Burus	65歳	テキサス (ダラス市)	4年	2人	3	抵当証書のブローカー	万ドル 4.5以上
J. Palast	68	イリノイ (シカゴ市)	2	2	2	繊維会社の役員	—
S. Platkin	69	ノース・ダコタ (ファルゴ市)	2	2	2	歯科技師	3.5
H. Fingerman	73	ニュー・ヨーク (ニュー・ヨーク市)	4	1	2	眼科技師	2.5
M. Margohin	73	ニュー・ジャージー	4	2	2	社長 (3社)	12.0
R. McClintic	75	カリフォルニア (ロス・アンジ エルス市)	7	2	2	市管理職	—
C. Hulnick	78	ニュー・ジャージー	4	2	2	会社役員	—

氏名はすべて仮名であり、—は無回答を示す。

まず表2の男性からみていこう。すべてが引退者であり、65歳以上の高齢者である。なかにはもう10年以上も以前に引退した高齢者もいるが、現住地の居住期間は引退生活の期間にくらべて比較的短い。というのは、オークス・ノース自体が開発されてから10年ほどしかたっていないからである。7人の男性のうち Fingerman 氏だけが奥さんと死別し一人暮らしになっている。前職はいずれも企業の役員や管理職・専門職などの中間層以上の職業によって占められている。このような職業については快く答えてくれるのだが、所得や家計支出については、“税務署員とは関係ないから”といくらいつても答えてくれない高齢者もいた。前職の所得についてはかなりばらつきがあるが、引退時期もばらついているので、直接比較することはできない。そのなかで、6年も前の所得なのに、3つの会社の社長をしていたという Margohin 氏は年12万ドルにも達しており、いまでも会社

プロフィール

引退時期	現在の所得(年)	その内訳	生計費(月)	その主要な支出	所属クラブ	子や孫の訪問回数(年)	慢性病	通院回数(年)	現在の生活満足感
年前1	—	千ドル 年金 8.4	千ドル 3.0	食費, 旅行費, 家屋ローン返済	ボーリング, ゴルフ	3	リウマチ関節炎	1	あり
2	—	—	—	—	ダンス, 旅行	3	なし	1	あり
2	2.3	年金 12 貯蓄から 11	1.5	食費, 旅行費	木工, 宝石	12~15	なし	0	あり
12	1.5	貯蓄から	1.2	娯楽費	ゴルフ, テニス, カード	子なし	なし	0	不満 (単調過ぎる)
6	5.6	—	2.8	食費, 娯楽費	テニス, 慈善	3	なし	0	不満(重要なポストで働きたい)
10	—	—	—	—	(6クラブ)	—	多少あり	0	あり
4	—	—	2.9	食費, 衣服費, 娯楽費	宗教	12	なし	0	あり

を経営することに未練を残している。ちなみに彼は沖縄戦の参加者であり、現在息子さんが日本との貿易に携わっているせいもあり、日本に対して強い関心を抱いているようだった。

前職の所得にくらべれば現在の所得のばらつきはかなり小さい。さきの *Fingerman* 氏が年1.5万ドルでしかないが、一人暮らしにしても低過ぎるのかも知れない。現在の所得源は、当然、年金や貯蓄の取り崩しが多いが、すでに触れた投資活動による収益もかなりのウェイトを占めている模様である。現在の所得の開きに対応して月々の家計支出にもある程度の差がみられる。その主要な支出としてかなり共通しているのは食費と娯楽費である。娯楽費がかさむのは旅行費などとともに、前述のような引退生活をそのまま反映している、とみてよい。食費が目立つのも、ダイエットどころか、“好きなときに好きなものを食べることを大きな楽しみとしている高齢者が多く、ランチョ・バーナード内に何軒もあるレストランは結構繁昌している。その意味では食費のかなりの部分も娯楽費なのかも知れない。さらに、いかにも中流以上の高齢者らしく、なかなか身なりなどにもこっており、その方の出費も馬鹿にならないだろう。さらに多くの居住者はほとんど現金で住宅を購入しているようだが、なかには *Burus* 氏のように住宅購入ローン返済がまだ残っているケースもみられる。

引退生活者の楽しみはなんといっても表示したようなさまざまなクラブ活動にある。なかには、*McClintic* 氏のように軽い慢性病を持っていても6つのクラブに所属して忙しいほどに趣味活動をエンジョイしている例もある。さらに、さきの読書傾向からはあまりわからなかったが、宗教活動や慈善活動に熱心な高齢者もいる。それにくらべて子供や孫たちとの接触は比較的限られている。なかには毎月のように子供や孫たちなどが訪問してくるケースもみられるし、たとえ遠くても国内旅行などのついでにこれから出向くこともあるだろう。さきの管理人などからのヒヤリングでは、ここの高齢者は一般的に経済力もあり、ランチョ・バーナードの気候もよいので、子供や孫たちなどがよく訪ねてくるとのことである。しかし、そ

の頻度はあまり多くないのが一般的だし、日本の高齢者とは顕著に異なり、家族的な接触にはそれほど大きな関心を示さないように思われる。

すでに触れたように、今回の調査では水泳などのためにコミュニティ・センターまで出かけてきた高齢者を待ち構えていたわけだから、面接対象の大部分が非常に健康に恵まれた高齢者が多く、病院にもほとんどいないのは当然だろう。一般に年齢の割に老け込んだ感じの高齢者が多いアメリカのなかでは、今回の面接対象は非常に若々しい。現在の生活の満足感が高いのも、そのせいだろう。ただし、一人暮らしの Fingerman 氏のばあいは、少ない所得を娯楽費にずいぶん割いているようなのに、なお物足りなさを感じるのだろう、「平穩で単調過ぎる」という不満を洩らしている。もう一人、現在の生活に不満なのが、三つの会社の社長していた高額所得者の Margohin 氏である。彼はテニスや慈善事業に精を出しているのだが、会社経営をしていた時のような生甲斐を感じることができないのだろう、「まだ会社の重要な部所で活動してみたい」と述懐している。エリートなどに多い“仕事中毒”か“地位中毒”のタイプに属するのだろう。

女性のばあい

女性への面接は、長期間専業主婦だった高齢者も対象としたのだが、夫の前職や所得となると、それは夫を説得して聞き出して欲しい、といった感じでなかなかちゃんと回答してくれなかった。そこで表3には、れっきとした職業に就いていた三人の女性に登場してもらった。三人とも50歳代後半から60歳代前半の世代であり、男性よりかなり年齢が低い。というのは、結婚年齢の差異によるだけでなく、60歳代後半以上のより高齢者のばあいは専業主婦が多く、本格的な職業経験を持った女性が少ない事実をも反映しているのだろう。

その前職は、家政婦、会社秘書、看護婦というように、専門職としても会社の地位からみても男性よりランクの低い職業に就いていたことがわかる。近年、アメリカにおける女性の職業進出はめざましいものがあるとはいえ、現状でもとても平等化とはいえない水準に止まっているのだが³⁾、

高齢者のばあいその開きはより大きかったのである。したがってまた、前職の所得もまた、2～4年前のことなのに年2.5万ドル程度でしかなかったのである。しかも女性のばあいは、より高齢者の夫と死別しているケースが多く、それだけ一人暮らしも多く、現在の所得も家計支出も低位に止まっている。見かけは派手な身なりをして潑刺としているのだが、その反面細々と家計を支えている面も見逃がせない。

3) その点は、拙稿「男女雇用均等化の課題」、『労働レーダー』85年5月号、拙共著『女性技術者』有斐閣、85年でも多少触れておいた。

しかし、職業経験者の方が専業主婦の高齢者よりも年もより若いせいから、より健康的だったように見える。したがって、現在の生活の満足感も高いのだが、とりわけ年の若い McKay さんなどは面接時に傍にいた男性からからかわれていたようにボーイ・フレンドも多く、結構一人暮らしをエンジョイしている風だった。もう一人、現在独身の Diamond さんはより年輩の洗練された女性だったが、彼女は現在のような引退生活を過すのではなく、もっと会社で働きたかった、と思っていた。実は彼女はロッキード航空会社を4年前退職したのだが、半ば“肩たたき”のように退職を勧奨されたようである⁴⁾。退職を余儀なくされたあと、いろいろとサン・ディエゴなどで再就職の努力をしたようだったが、彼女にいわせると「企業

表3 女性高齢者の

氏名	年齢	前住地	現住地の居住期間	世帯人数	ベットのルーム数	前職	前職の所得(年)
N. McKay	56	カルフォルニア (サン・ホセ市)	3	1	2*	家政婦	2.5
B. Diamond	61	カルフォルニア (ロス・アンジ ェルス市)	4	1	2	航空会社 秘書	—
J. Carlton	64	インディアナ (ゲアリー市)	9	2	2	看護婦	2.5

氏名はいずれも仮名であり、—は無回答を示す。*は Condo の住宅である。

は高齢女性のキャリアを認めようとし「ない」ために、ついに思うような再就職はできなかった。すでに60歳も過ぎてしまったので、かつてほど強く再就職を希望していないようだが、かといって現在の引退生活に満足し切れないでいるのだろう。

- 4) 女性だけでなく高齢者に対する退職勧奨は、定年延長法が制定されてから少なくなっているはずだが (J. W. Walker and H. L. Lazer, *The End of Mandatory Retirement*, 1978, 拙稿「アメリカにおける定年延長法下の雇用保障」, 『季刊社会保障研究』81年冬季号), とくに女性のばあい, そうは簡単にならないのだろう。

サン・ディエゴのシティ・ホールにて

このように個々の高齢者に当たってみれば、折角の勤労意欲が実現されなかったり、一人暮らしの寂しさや不十分な所得や女性の地位の低さなどにもとづく不満が存在する。だが、ランチョ・バーナードの生活そのものへの不満はほとんどなく、とくに面接した高齢者は非常に健康だったので、現在の引退生活に満足している高齢者が多かったように思われる。少なくとも現在の生活を積極的にエンジョイしようとする前向きな姿勢を持ったエピキュリアンが多いのである。その意味で、より低学歴で前職の職業階層が低く、ブルーカラー出身の高齢者が、余暇を楽しむ経験を持たず、引退

プロフィール

引退時期	現在の所得(年)	その内訳	生計費(月)	その主要な支出	所属クラブ	子や孫の訪問回数(年)	慢性病	通院回数(年)	現在の生活満足感
4	2.5	投資収益	1.4	—	テニス	時々	なし	0	あり
4	—	—	—	—	テニス	3~4	なし	0	不満(会社で働きたかった)
2	—	年金, 貯蓄から	2.0	食費, 家屋ローン返済	宗教	2	なし	0	あり

とともに所得も低下し、しかも楽しみもなく役割喪失感に陥ってしまう⁵⁾のとは、いちじるしく異なっている。サン・ディエゴ市役所の高齢者サービス事業についてもヒヤリングしてみたが、その主要な対象になっている低所得や不健康などの高齢者生活とは顕著な対照を示している。

5) R. C. Atchley, *Sociology of Retirement*, 1976, chap. 3~4, 8~9, また拙稿「リタイアメントの社会科学」, 大原社研『研究資料月報』83年11月号をみよ。

市当局の高齢者福祉サービスは12項目ほどにまとめられるが、かならずしも特定の高齢者だけを対象としているのではなく、高齢者一般を対象とした事業も多い。すでに救貧政策から脱却し高齢者全体を対象とする福祉政策に転換しているのである。(1)高齢者サービスに関する情報の照会への対応。これは市内5ヶ所のサテライト・ステーションにおもにヴォランティアが詰めており、週2千件近くも高齢者にさまざまな情報を提供している⁶⁾。(2)保険の分析と推薦。すでに、例えばメディケアとのギャップを埋めるための私保険が発達しているが、大した価値のない保険を購入させられるケースが多い、といわれている。そこで公的にさまざまな保険の価値を評価し、より適切な保険を推薦することで、平均して1件あたり何100ドルもの浪費を防止しているという。(3)保健サービス。後出の給食プログラムの出先に看護婦などが詰めており、健康相談や血圧測定などを無料で行う。さらに保健サービスの専門機関と関係をとると同時に、必要に応じて看護婦の家庭訪問も行う。

6) このなかには高齢者割引きの情報も含まれている。ショーや小旅行やレストランなどには何%かの高齢者割引きが行われるばあいが多いが、その情報が提供されると同時に1ドルで割引きカードが販売されている。そのほか、耳の悪い高齢者には、テレタイプや手話によってさまざまなサービスも行われている。そのためのヴォランティアには、耳の悪い高齢者も参加している。

こうした一般的サービスのほか、(1)電話パートナー・サービス。家にこもりがちの一人暮らしの高齢者に対して、元気づけのために日曜祭日もなく一日に一回は電話サービスが行われている。そのために20人あまりのヴォランティアが常時従事している。(2)病院・家庭訪問。これもヴォランティア

アを中心として行われるが、入院中の病人や退院して家庭で回復しつつある高齢者に対して慰問が行われている。(3)雇用サービス。就業を希望する高齢者に対して、雇用カウンセラーがそのニーズを評価すると同時に、職業紹介を援助している。年間千件近くも扱うそうだが、それとともにそのために求人も開拓しており、高齢者ができる仕事ならなんでも紹介すると同時に、フルタイムやパートタイムなど、いろいろな勤務形態を斡旋しているようである。(4)教育プログラム。例えば読み書きの不自由な高齢者や若者に対して、いろいろな言語で読み書きできるようになるための教育訓練がマン・トゥ・マンで実施されており、何百人かのチューターが活動している。そのほか、高齢者のさまざまな能力を高めるためのプログラムも行われている。(5)給食サービス。市内何ヶ所かの公立学校などのキャンパスで、低所得など的高齢者に対して65セントであたたかい昼食を提供している。何かの理由で調理のできない中高齢者にも1ドルで提供している。そのほか、低所得など的高齢者が多く住んでいるモデル地区を対象として、家にこもりがちの一人暮らしの高齢者にも85セントであたたかい食事を提供している。全体で1日2千食ほども提供しているそうである。

これらの事業の多くには、エイジェンシーに組織された、高齢者も含むヴォランティアが従事しているが、シティ・ホールではこのようなヴォランティア希望者と面接し、選択し、適切に配置しており、市民の専門的な知識や技術をできるだけ広く活用するよう工夫されている。このような地方自治体の高齢者福祉サービスは、前述のように特定の高齢者だけでなく、高齢者全体も対象しているが、事実上、対象の中心になるのは、低学歴、低所得、病弱、有色などの特定の高齢者に多い。このような公共福祉の対象になる高齢者とランチョ・パーナードなど的高齢者を比較すると、いかに所得や健康などの面で高齢者内部に大きな格差があるかがわかるだろう。

5. 有料老人ホームとの比較

日本型ホームの問題点

これまでランチョ・バーナードの高齢者コミュニティについて概観し、いかにもアメリカらしい中流以上の高齢者の生活を垣間みてみたが、こうしたコミュニティと比較して、日本の有料老人ホームがどのような特徴を持っているかについて若干考察しておこう。

日本の有料老人ホームについては、二つの異なったタイプについて見聞したことがあるが、一つは分譲マンションが温泉地の既存のコミュニティの一角に位置しているケースであり、もう一つは返済制度付きの入居金方式で別荘地のなかに独自のコミュニティを形作っている。いずれも静岡県的气候温暖な保養地に存在するが、共通して指摘できることは独立したコミュニティとしてきわめて不十分だ、ということである。もっともマンションの方は既存のコミュニティのなかにあり、地方自治体の老人医療の便宜が受けられたり、既存の住民と共通の病院や商店街などを利用できる点ではランチョ・バーナードのケースに似ているが、大きな温泉地に立地しているという制約を免がれない。もう一つは、別荘や保養所などの多い地域に比較的広い敷地を持ち、二階建の集合住宅と病院や食堂などの共用施設の建物から構成されているが、リゾートだけに生活上のさまざまな不便がある。

マンションの方は、分譲価格が1LK、2K、1LDKなどで2～3千万円もし、ほかに管理費を支払っているから、ちょっとしたホテル並みの居住性を享受できるが、ほぼ同じ間取りで利用権価格が2人入居で2千万円を上回るコミュニティの方は、管理費もいくらか安い、公営団地並みのアメニティしか期待できないようだった。ただし、共用の大きな食堂や浴場が備えられているのは、アメリカなどにはない利点だ、とあってよい。

とくに食堂があることは、長い間の炊事労働から主婦を解放し、非常に歓迎されている面もある。しかも食事そのものが、高齢者向けに健康的に

管理されており、アメリカなどではみられないメリットがある。しかし、肥満や成人病の予防の面は理解できるとしては、比較的限られたメニューを決まって時間に摂らねばならぬことにはアメリカの高齢者は到底適応できないだろう。というのは、すでに触れたように彼らの自己主張というのは実はこれだったのか、と思えるほど、好きなときに好きな物を食べることにこだわるようだからである。さらに共同浴場だからだけでなく、幼い頃母親などから強制されていやいやバスに入ったことが高齢化してから思い出すのか、アメリカの高齢者はバスを使うことを避けようとする向きがあるようである。こうした点は気候風土や風呂好きの日本人の特性を基準として理解しなければならないだろう。

このように日本の実状に対応した施設やサービスもあるが、施設やクラブ活動などの充実の水準はあきらかにランチョ・バーナードの水準より劣っている。例えば「有料老人ホーム」にも体操室などはあるにせよ、また近くにある施設を利用すればゲート・ホールやゴルフなどを楽しむことはできるとしても、ランチョ・バーナードの水泳、ローン・ボウル、テニスなどの施設に比べれば、スポーツ設備はより劣っている。またクラブ活動も、日本のばあいは、けいごごとに特化しており、ランチョ・バーナードにくらべて多様性の点で貧弱だ、といわざるをえない。これも一概に評価すべきではないだろう。アメリカの高齢者の好みはスポーツなどを始め、いわば動なのに対し、日本の高齢者の多くは散歩のような静なのである。サークル活動ではアメリカは娯乐的であるのに対し、日本の方は教養・修養的であり、習いごとを好むのである。それにしても、見聞した図書館の貧弱さは、ランチョ・バーナードの図書館と比較すれば明瞭である。このような共同施設などについては、せいぜい300戸足らずの集合住宅なので、ランチョ・バーナードなどとは異なり、いわば規模の経済性を発揮できない面のあることも看過できない。

さらに日本のばあいは、隣近所に気を使うことの多い集合住宅であるうえに、専有の居住空間がなんとしても狭く、窮屈な感じを免がれない⁷⁾。あ

る調査によると、有料老人ホームの専有面積は広くても20坪足らずに止まっており、前述のとおりランチョ・バーナードの半分くらいでしかない⁸⁾。この点は、あきらかに入居者のニーズを下回っており⁹⁾、入居者の不満の一要因にもなっている。現にマンション型の入居がより広い住宅から先に決まっていく、という事実にもあらわれる。さらに、キッチンなどの設備などもかならずしも“リッチ”とはいえないようである。訪問したマンションの方は比較的ましだったが、コミュニティの方はお粗末だった。その面でも公営住宅のイメージが強いのである。

- 7) なお、新しい住宅問題については、木下茂徳「ニューメディア時代における高齢者住宅のあり方及び生活変化の対応について」、老人福祉開発センター中間報告、1985年などもみよ。
- 8) 全国有料老人ホーム協会「有料老人ホーム実態調査」1983年をみよ。
- 9) 同上「有料老人ホームに関する需要動向と利用者ニーズの調査報告」1984年をみよ。

高齢者のパーソナリティ

管理費・光熱費のほかに食堂を利用するばあいは食費が加わるが、夫婦二人で月額15万円前後である点は、訪問した温泉地のマンションのばあいも、別荘地の集合住宅のばあいもほとんど変わりなかった。だが、前述のように分譲と利用権の購入価格にある程度の差があるように、入居者の社会階層にも差がある。マンションの方は経営者出身がもっと多いのに対し、コミュニティの方は公務員出身がもっとも多い。しかし、いずれも中流以上の職業を前職とし高学歴者が多い点はランチョ・バーナードのばあいと同じである。さらに、日本の高齢者のばあいも比較的大型の海外旅行などがふえつつある点で、日米の消費水準は接近しつつある、とみてよい。だが、ランチョ・バーナードの Margohin 氏などのような現在でも比較的高額の所得者が少ない点が異なっている。また、所得源でも年金を中心とし貯蓄の引出しが多い点は似ているが、ランチョ・バーナードの方が自己資金をふやそうとする投資行動により熱心だったように思われる。

さらに日本の有料老人ホームの高齢者に特徴的なのは、その入居動機に

示される精神的姿勢であろう。ランチョ・バーナードのばあいは、前述のように大きな家屋の維持を嫌って、それを売却し、移住してきたわけだが、その点は大なり小なり類似しているとしても、アメリカの高齢者は健康を損ね、身回りのことが自分でできなくなったら、そのときはナーシング・ホームなり病院なりに移ると割切って、その日々を楽しく過そうとしているのに対し、日本の高齢者はかなり異なった姿勢をとっている。彼らの入居動機は「将来の不安」という理由がかなり多い。その内容は健康状態の悪化であり、自分あるいはつれあいの健康が衰えたばあい、なんらかの介護が期待できることが大きな入居理由になっているのである。したがって、そうした考えのきっかけは、なかには家族関係の問題もからむケースもあるだろうが、より直接的には自分あるいはつれあいが病気になった経験に結びついているのである¹⁰⁾。日本人はより取越し苦労症なのだろうか。

10) 前掲「有料老人ホーム実態調査」83年をみよ。さらに、日本老人福祉財団「老人福祉研究」第5巻でも、より立ち入った調査結果が報告されている。

このようなニーズが中心になっているために、マンションでは健康診断のサービスに力点を置き、病院との関係を保っているし、とくにコミュニティの方は病院と特別養護老人ホームとをコミュニティ内で兼営しているのである。現に、入居条件はいずれも自分で身回りのことができることにあるのに、とくにコミュニティの方でしだいに介護を必要とするケースがふえてきているようである。全国的には付設の診療所などの経営難が伝えられるのも、そのためだろう。その面では、アメリカの Retirement Home と同様な問題が発生しつつあるわけである。

ただし、今後は日本の中流以上の高齢者のパーソナリティもしだいに変化し、アメリカ型に似てくることも予想されるだろう。そうなればそうなたたで、これまでみてきた有料老人ホームの不十分な諸点に加えて、もっと新しい欠陥が浮彫になってくるかも知れない。いずれにせよ、有料老人ホームの現状を改善することは、いまだに個室方式さえ十分に普及していない公的老人ホームの生活様式を向上させる一つの動因としても有意義な

効果を持つに違いないのである。

〔後記〕 ランチョ・バーナードなどには何回となく訪問することになったが、その際、田中道博君には思いがけず大変お世話になった。同君は雑誌『法政』85年6月号の拙文にも登場してもらったが、ボストンのパークリー音楽院で音楽業界の経営などについても研究してきたせいも、アンケート調査票の設計まで含めて大変協力してもらった。記して謝意を表しておきたい。